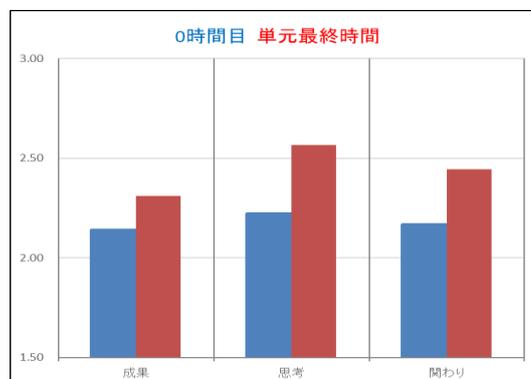
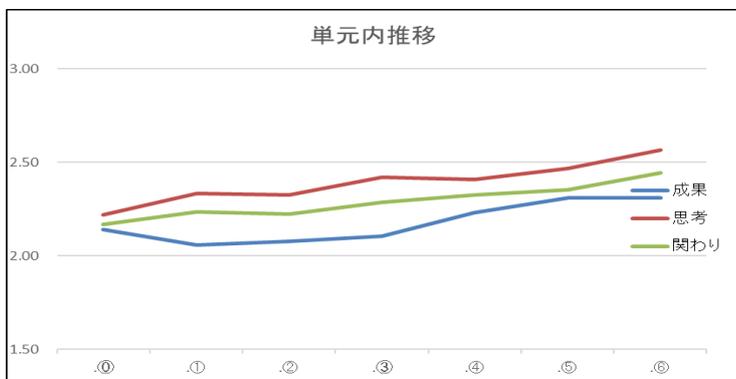


1 単元名 肩より腰の高い大きな開脚跳び (器械運動・跳び箱運動)

2 児童の変容

(1) 情意面 (形成的授業評価をもとにした授業評価から) 男子16名 女子16名 計32名



- ・「成果」は単元前と単元最終時間の数値を比べると、あまり伸びは見られなかった。児童にとって目標とする技の難易度が高く、なかなか自身の伸びを感じられなかったことが原因と考えられる。一方で、単元後半には高い数値を記録した。これは、単元後半の課題解決学習において、一人一人が課題を解決するために試行錯誤した結果、技能向上を感じることができたことがうかがえる。
- ・「思考」は単元前よりも単元最終時間の数値の方が高くなった。知識・技能の習得に重点を置いた単元前半は低い数値だったが、思考をはたらかせる学習を重視した単元中盤～後半は数値が大きく変化して高くなった。これは、教師が思考をはたらかせるための学習を意図的に設定したことが奏功し、児童も自身の課題を解決するために思考しながら練習に取り組むことができていたからだと考えられる。
- ・「関わり」は単元前よりも単元最終時間の数値が高くなった。2時間目に高い数値を記録したのは、自身の課題を見付けるために、グループの友達と見合いながら学習したことが要因であると考えられる。単元後半では、課題解決学習において課題が同じ友達と関わり合いながら、友達と共に試行錯誤しながら学習できたことで、数値が高くなったと考えられる。また、6時間目が一番伸びていた要因として、もう一度異質グループで見合う活動を設けたことで、お互いの伸びを認め合えたからだと考えられる。

(2) 技能面

	①かえるの足打ち (かえるの足打ちができる)			②飛び乗りができる (膝を伸ばして)		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	18	7	7	11	21	0
単元後	25	7	0	22	10	0

	③開脚跳び (肩と腰が跳び箱と平行)			④抱え込み跳び (抱え込み跳びがとべる)		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	8	23	1	20	6	6
単元後	28	4	0	22	6	4

- ・単元前と比較して数値の上昇が見られる。肩より腰の高い大きな開脚跳びに直結した体ならしの運動(うさぎ跳び、カエルの足打ち、馬跳びなど)を、サーキット形式で毎時間行ったことが、技能向上の一要因として考えられる。また、単元後半の課題解決学習の際に、自分の課題解決のために効果的な練習方法や場を選んで練習できたことが有効であったと思われる。
- ・前学年でも取り組んだ肩と腰が平行の開脚跳びは多くの児童ができるようになったが、本単元の主運動である肩より腰の高い開脚跳びは、できる児童とできない児童の二極化が起ってしまっており、腰を高くする感覚が掴めずに終わってしまった児童もいた。器械運動に限らず様々な領域で多様な運動を経験できるようにすることや、下学年からの学習を積み重ねることで、無理なく主運動に挑戦できる児童を育てていきたい。

(3) 思考面

問 肩より腰の高い開脚跳びができるようになるために、どのような練習や取り組みが必要だと思いますか(しましたか)。(複数可)			
単元前		単元後	
・高く跳ぶ練習	10	・ロイター板を使って跳ぶ練習	20
・助走の練習	8	・ポイントを意識した練習	8
・踏み切り板を踏み込む練習	8	・ペアでアドバイスをした	8
・腰を高く上げる練習	7	・自分に合った高さを見つけた	5
・意識して練習する	7	・動画を見て比べた	5
・ペアでアドバイスをする	3	・体ならしの運動を丁寧に行った	4
・体をやわらかくする	3	・エバーマットに飛び込む練習	4
・手をしっかりとつく練習	3	・跳び前転の練習	3
・自分に合わせた練習をする	3	・ロイター板で踏み切りの練習	3
・たくさん練習する	3	・怖がらない	1
・跳び前転をする	1	・集中して練習した	1
・動画を見て比べる	1	・たくさん練習した	1

- ・肩より腰の高い開脚跳びの知識が定着し、技能ポイントを踏まえた具体的な取組や学習についての記述が増えた。児童が技能ポイントを意識し、自己の課題解決に向けて必要なことを考えながら学習することができた成果だと考える。
- ・課題解決のための具体的な取組の記述が増えた。練習方法や場を考えると意識すること、友達との関わりなどについての記述の量が増えた。自己の課題解決のために必要なことを意識して場を選んだり、上達する方法を考えたりしながら学習することができていたことがうかがえる。

3 成果と課題

高学年のめざす姿
課題に対して自分の考えをもったり、仲間と試行錯誤したりするとともに、解決する場や方法を伝え合う児童

【成果】

- ・体ならしの運動のポイントを意識することや課題解決のための思考がしやすくなるように、選択肢を与える発問や活動を取り入れたことで、AとBを比較してどちらがよりよいか考えながら練習に取り組むことができた。「自分の課題は〇〇だからAの方がよい」などという理由付けを行い、それを全員で共有することで、主運動や課題解決につなげることができた。子供たちが学習の中で思考する際に、選択肢を与えたり、比較して考えたりすることは有効であると感じた。学習カードも同様である。
- ・フローチャートを活用したことで、自分の実態や課題が把握しやすくなった。それをもとに、次のステップにいくための練習方法や場の工夫、仲間との見合い、補助など自分に必要なことを選択し、課題解決に向けて取り組むことができている児童が多かった。自分自身を客観的に見て現状を把握し、課題解決学習を進めていく上で、フローチャートは重要であると考えられる。
- ・単元前半は学び方の素地をつくるために、また、単元後半も様々な技能段階の人と関わられるように、異質グループで活動した。単元全体を通して技能差に関係なくアドバイスや補助をすることができているグループが多く見られた。単元後半では、他のグループや似たような課題を抱えている子同士でより具体的にアドバイスをすることができている児童が多かった。学習のねらいにそってグループを構成する必要性を強く感じた。

【課題】

- ・技能ポイントに着目し意識しながら練習するために、できている理由やできていない理由を考える発問や活動を取り入れたが、児童が「わかる」＝「できる」になるための有効な支援をすることができなかった。「大事なポイントはわかっているのだけれどできない。どうすればよいかわからない」という児童に対しての支援策を考えていきたい。
- ・自分に合った練習の場を選べるように、実態に合った場を用意したり、児童の様子を見ながら臨機応変に場を変更したりすることができたことはよかった。しかし、ただ活動するだけの時間が多くなり、活動が停滞してしまっているところもあった。「この課題を解決するためにはこの練習をする」というような、課題解決に直結するヒントや練習方法をもっと提示できるようにしていきたい。